
薄桜魂～新・真選組奇譚～

陽炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薄桜魂〜新・真選組奇譚〜

【Nコード】

N3321X

【作者名】

陽炎

【あらすじ】

薄桜鬼の千鶴& a m p ; 攻略キャラクターが銀魂の世界にトリップして、真選組で働くことになった!? 《注意》ネーミングはちょいシリアスっぽいですが、中身は完全にギャグコメです。なお、万事屋は都合上殆ど出てこないといっても差し支えないです。主に真選組と新選組がメインになります。また、作者は千鶴絶対主義なのでみんな千鶴を可愛がります。ていうか逆ハ！。何か読みたい話とかあったら言ってください。書ければ書きます。もう一本連載があるので多分亀更新になります。

異世界？ありがちなオイ

ある日のこと。

万事屋の3人は朝から源外に「依頼がある」と呼び出されていた。眠い目をこすりながら源外の工場へ行つた3人を待っていたのは、イラツとくるドヤ顔をして仁王立ちしている源外だった。

「おう、来たか銀の字！」

「おう、来ちゃったよ銀の字。とりあえずそのドヤ顔やめろ。すげえムカつく。」

「源外さん、今日はどういった依頼なんですか？」

「くだらねー依頼だったらぶっ飛ばすアル。」

万事屋の面々が口々に言うと、

「……ふっ、へへへへへへへへへへ！」

いきなり奇声を上げ始めた源外にギョツとなる3人。

「おい、とうとうジジイぼけ始めたか？」

「ぼけてレベルじゃないですよ。もう完全に精神病ですよ。」

「ていうか放っておいて平気アルか？救急車呼ぶアルか？」

ひそひそと相談を始めた3人に、「おい待て。俺はまだぼけてねえ。」と冷たい声で突っ込む源外。

「実は最近、時空学をちょいと齧ってな、すげえシロモンを作った

のよー!」

「どうせ醤油が出るマジックペンとかだろ。」

「時空学つったろが。てか、醤油が出るマジックペンって、書きたびに醤油の香ばしい香りがあたりに広がっちゃまうじゃねーか。」

額に青筋を浮かべながら源外が言った。

「でも、本当に何作ったんですか?」

「早く済ませて酢昆布のバーゲンに行かなきゃいけないアル。」

新八と神楽が全くバラバラのことを言うと、ようやく源外が話題に戻った。

「聞いて驚け!これぞ、異空間物体召喚装置だ!」

源外がぱつと手で示した先には、おわんを逆さまにしたような物が天井につるされ、そこから細いものから太いものまで数十本のコードが繋がっていた。

「これはな、この世界とは違う異空間の次元を歪めて、異世界のモンを連れてきてくれる科学最高峰の装置なのよ!」

興奮気味にまくしたてる源外。しかし、3人の反応は薄い。

「ふーん、へー、凄いなオジイサン。」

「今年の政府、どう思う神楽ちゃん？」

「私の予想では長く持たないヨ。持って1年ネ。」

最後の2人に至っては全く関係の無い話をしている。

「テメエら俺の話聞いてたか！？とにかくこれはすんげー発明品なんだよ！それこそ学会に発表したら、××億円どころか 兆円くらいは余裕で手に入るくらいなのな！そしたら、テメエらに払える依頼料も

」

3人の変わり身は早かった。

「異空間のブツタイをシヨウカンできるんですって？素晴らしい発明品じゃないですか、お爺さん！」

「流石は源外さん！いつかはやれると信じてましたよ！」

「それで、ご依頼の件は？」

目の色を変えて迫る3人。源外も悪い気はしないのか、がはははと口をあけて笑う。

「すげえだろう！そこでだ、お前さんたちに頼みたいことってのはな！」

更に源外が手でバツと指し示す。

「コイツ、じつは電力を半端なく喰らいやがるのよ。だからお前さんたちには、その発電機で電力を発電してもらおう！」

その先には、三台の自転車が。

「おう！！」と声を上げて、3人は自転車にまたがると、凄まじい勢いでこぎ始めた。

壁に掛けてある電力ゲージがぐんぐん上がっていく。

「おお！この勢いなら今すぐにでもできるぜ！」

「なら話は早え！」

「」「」「さっさとやれや！」」「」

「おうよ！」

3人に親指を立てれば、ニヤリとした笑顔で返された。

「いくぞー！」

「「「おお！！！！」」」

源外がレバーを引いた瞬間、電子音を立てて機械が作動し始めた。

天井のおわんが、白くまぶしく輝き始める。

そして、ひときわ強い光を放った途端　　。

工場が木っ端微塵に吹き飛んだ。

「・・・失敗したみてえだな。」

「・・・そうですね。」

「・・・ジジイはどこアル。」

神楽のセリフと共に、3人はゆっくりと背後を見た。

そこには、三郎に担がれてえっほいえっほいと逃げる源外が。

3人は、大きく息を吸って叫んだ。

「殺してやるクンジジイイイイイイイイイイイイイイイイイ」

異世界？ありがちなオイ（後書き）

始めちゃったぜ新連載。

実は構想段階から言つと2ヶ月くらい前から頭の中で温めてました。

でも・・・やっぱり文章にするのはきつい。

隙間風には気をつける

同時刻

。

新撰組の大広間では、所用で出掛けた近藤と、巡察に向かった永倉と井上を除いた幹部全員と千鶴が、朝食の片づけをしている最中だった。

が、ふと土方が眉根を寄せて辺りを見回した。

「どうかしましたか、副長。」

その様子にいち早く気がついた斎藤一が土方に声を掛ける。

「いや・・・何か変な音がしないか？」

「音、ですか？」

その言葉に、広間に居た全員が動きを止めた。

「土方さん、とうとう耳が腐り始めたんじゃないですか？」

楽しそうに茶々を入れるのは常に飄々とした笑みを浮かべている沖田総司だ。

「馬鹿野郎！腐ってたまるか！微かにだが、聞こえるんだよ！」

「まあまあ、落ち着けよ土方さん。」

ムキになって怒る土方を、大人な原田がやんわりと宥める。

「音、かぁ・・・俺は聞こえないけどな。」

新撰組最年少幹部の藤堂平助が耳を澄ませながら答えた。

すると、

「あ、でも・・・何かが聞こえます!」

新撰組お預かりの男装の少女 雪村千鶴が声を張り上げると、
皆が一様にそちらを向いた。

「お前も聞こえるのか、千鶴?」

「はい。何だか、風が吹き込むような音が微かにします。」

土方の問いに千鶴が答えた途端。

「・・・あ! 本当だ、風みたいな音がする!」

「隙間風か、こりゃあ?」

「どっから吹き込むっていうのさ。」

「確かに、聞こえる・・・。」

幹部達が口々に声を上げた。

「にしても、一体どっから吹き込んでいやがるんだ？」

「今日はそんなに風は強くないんだけどね。」

「じゃあ、床下からか？」

「有り得んな。」

「じゃあ、どっから聞こえるってんだよ？」

「あのお。。。。。」

「ん？どした、千鶴。」

千鶴が恐る恐ると言つように口を開いた。

「気のせいかもしれませんが・・・この音、段々大きくなってきてませんか？」

その途端、耳を済ませてやっと聞こえる程度の音量だった音が、一気に大嵐のときの風のような音量にまで跳ね上がった。

それどころか、部屋全体にびゅうびゅうと風が吹き荒れる。

「おい、どうなってんだこれは！」

「そんなもん知るわけ無いでしょ、頭おかしいんじゃないの土方さんは！」

「う、うわぁ！」

「おい平助！飛ばされんなよ！」

「一体、何が……！」

「きゃあ！」

6人の中で一番体重の軽い千鶴がとうとう空中に浮いた。

そのまま吹っ飛んでいきそうなところを、斎藤に抱きとめられる。

「大丈夫か、千鶴。」

「あ、ありがとうございます斎藤さん。」

「ダメじゃない千鶴ちゃん。ーくんじゃなくて、僕にしがみつきなよ。」

「総司！んなこと言ってる場合か！」

と、平助が叫び声をあげた。

「おい！何だよあれ！？」

天井を見て叫ぶ平助につられて、全員が上を見上げた。

するとそこには、まるでブラックホールのような黒い円がぽっかりと開き、風が凄い勢いで放出されていた。

「んだありゃ!?!」

「うわゝ、すごいなあ。」

「どどどどど、どどどどどしよ左之さん!」

「どつもしよつがねえよ!何だか分かんねえんだから!」

□々に皆が声を上げて動揺する中(若干一名除く)、斎藤が言った。

「副長!とりあず、この部屋から出たほつがよろしいのでは?」

「ああ、そうだな!おいテメエら、この部屋から

「

土方が言いかけたとき、風向きが変わった。

黒い円から風が放出されていたはずなのに、吸い込まれ始めたのだ。

「んなつ!?!」

「うーわー、吸い込まれるー。」

「緊張感ねえな、総司!」

「きゃあああ!?!」

「千鶴!?!俺に掴まれ!」

「だめだ、原田に障ったら妊娠するぞ千鶴!」

「どついう意味だ斎藤!」

風が収まったときには、その広間に居たものは全員消えていた。

もちろん、あの黒い円に吸い込まれて。

隙間風には気をつける（後書き）

うまくキャラを使い分けられている気がしない。

自分が平助の上に落ちたということに。

「じじじじじごめん！重かったよね！」

千鶴も思わず頬が朱に染まり、平助の上から飛びのいた。

「い、いや！重かったとかじゃなくて！びっくりしただけだから！」

真っ赤な顔でぶんぶんと手を振る平助の後ろに黒い気を纏った3人の男がゆらり。

「羨ましいなー、平助。死ねばいいのに。」

「総司！？何言うんだよ！」

「・・・平助、土道不覚語で切腹しろ。」

「一君！？」

「安心しろ、平助。介錯はしてやるから。」

「左之さんまで！？ていうか、何で皆そんなに殺気に満ちてるんだよ！？」

「み、皆さん落ち着いてください！私が悪かったんです！」

やいのやいのと揉める5人を静まらせたのは、やはりというか。

「うるせえ！そんなことで揉めてんじゃねえよ！」

土方の怒鳴り声にぴたりと動きを止める若干4名。（約一人は黒い笑顔）

「てめえらこの状況が分かってんのか！」

「この状況、ってねえ……。」

沖田が辺りをぐるりと見回して、一言。

「……、一体どこなわけ？」

そのセリフに、ようやく一同は辺りを見回した。

騒いでいたせいで気がつかなかったが、どうやらここはどこの森のようだ。

気がついたように再び騒ぎ始める。

「ここは一体どこなんだ？何で俺達はここにいる？」

「んなのこっちが聞いてえって土方さん。確か俺達は……。」

「変な黒い円に吸い込まれたはずだ。」

「うんうん！それで何かめっちゃ強い風が吹いてさ！」

「気がついたらここにいた、というわけですか……。」

「どうにも可笑しな話だよねえ。」

そこでまた、うんと考え込む。

何がどうしてどうなって、今自分達が屯所ではなく森の中に居るの

「くっそ！あのジジイどこ行きやがった！」
「あんだだけ大口叩いておきながら失敗しやがって！」
「見つけたらタダじゃおかないアル！」

万事屋の3人はあれから逃げた源外を探すべく町を駆け回っていたが、結局のところ見つけれず、だんだんと怒りのボルテージだけが下がっていった。

「はぁ・・・もういいわ。何か疲れたよ銀さん。」
「どうでもよくなってきちゃいましたよ・・・。」
「スーパー寄って帰るネ。」
「おっ、いいねー。いちご牛乳買おうかなー。」
「ふりかけとお米もですよ？」
「ワタシ酢昆布がいいネ！」

何かほのぼのした会話を繰り広げながら大江戸スーパーに向かおうとした直後。

ズドガン！！！！

「「「ぎゃあああああ！」「」「」

複数の悲鳴と破壊音が聞こえてきた。

「何かあったんでしょうか!？」

「行ってみるネ、銀ちゃん!」

「え、銀さんダルい・・・。」

銀時の意見はないがしろにされ、結局3人は事件現場へと向かうことになってしまった。

それが後々厄介なことに関わるということとは、まだ彼らは知らない。

《おまけ》

ここは、かぶき町繁華街。

多くの人が行きかう中で、一人、注目を集めている男が居た。

短い金髪に紅い目をしたその男はいかにも高級そうな着流しを羽織っていた。

その身に纏う雰囲気もどこか高貴さが伺えるもので、とてもこのよ
うな場所に居る人物とは思えない。

戦慄さえ覚えるほどに端麗なその顔が、今は啞然とした驚きに満ち
ていた。

そして、やっとのことで、彼は声を出した。

「……………」は、どじだ……………」

西の鬼の頭領、風間千景は呟いた。

こんには異世界（後書き）

風間大好きなんです。

彼には後々色々乱入して欲しいです。

新選組と真選組

「「「「「.....」」」」」

新選組一同は皆一様にぼかんとしていた。鬼の副長と呼ばれる土方や、いつも飄々とした態度を崩さない沖田でさえも、である。

それも当然といえようか。

彼らの眼前には、生まれてこの方一度も見たこと無いようなものばかりが広がっているのだから。

まるで大阪城のように高い建物がいくつも連なり、大きな金属の塊に人が乗り、汚い空気を撒き散らしながら凄まじいスピードで走り去っていく。

そして、そんな光景に平然としている人々は、自分達と同じ着物を着てはいるが、やはり自分達の知らないものを使って平然としている。

一番最初に立ち直って言葉を発したのは、やっぱり鬼の副長だった。

「.....どうなってんだ、こりゃあ.....?」

次に立ち直った総司はおもしろそうな声を出した。

「何が起こってるのか分かりませんが.....ちょっとそこらへんの人に聞いてきますね。」

そういうと油断無くあたりに目を走らせている一人と未だに呆然と
している三人を置いて、そこから辺を歩いていった町娘に「ねえ、ちょ
っと」とにこやかに声を掛けた。

もともと顔立ちは並以上というか特上の部類に入る上に、いつもに
こやかな笑みを絶やさない沖田だから町娘も頬を紅く染めている。

というより、全員が全員特上の部類に入る顔立ちの集団故に、さっ
きからかなり人目を集めているのだが、余裕のない彼らにそれを気
にする余裕は無い。

しばらく総司は町娘とやりとりしていたが、やがて「ありがとう」
とにこやかな笑顔でお礼を言ってから戻ってきた。

「えーつとね、まあどっから話せばいいのやら……。」

珍しく総司が困ったような顔をして頭をかく。しかし、ようやく立
ち直った斎藤と原田、平助と千鶴に一齐に詰め寄られた。

「もったいぶるな！早く分かったことを話せ！」「そーだぞ総司！」
「何が分かったんだ？」「沖田さん、今何がどうなってるんですか。
……？」

とまあ色々言われて、まあまあと宥めながら、口を開いた。

「うん、ここね・・・江戸らしいよ？」

「「「「「・・・は？」「」「」「」

ぼかんとする一同。もちろんそれは土方も例外では無い。
しかし今度はすぐに立ち直った。

「はああ！？江戸お？ふざけてんのかテメエは！」

「落ち着けて土方さん！でも、それってマジか！？」

「いつもの悪い冗談なのか総司！ならば承知せんぞ！」

「でもさ、ついさっきまで京にいたろ！？何で江戸なんだよ！？」

「江戸から京って、そんなに短い距離でしたっけ？」

「千鶴！簡単に信じるな！しかも突っ込むところが一人だけ違う！」

詰め寄られてうんざりしたのが、総司も大きな声で叫んだ。

「そんなの僕が知るわけ無いでしょ！でもさ、ここが京じゃないことくらい、周りにあるもの見れば分かるでしょ！」

その声に一気に冷静さを取り戻す一同。

「まあ、確かにここが京じゃねえことは明白だが・・・。」

「じゃあどこだつてんだよ!？」

「俺に聞くな平助!そんなの分かるわけないだろ!」

「分からん・・・何が起こつたんだ?」

「私が江戸から京に来たときは、数日掛かったのですが・・・。」

「千鶴ちゃん?まさかこんな短時間で京から歩いて江戸に来たか思つてないよね?」

話し合いを続ける土方、総司、斎藤、原田、平助、千鶴。

しかし、往來のど真ん中で大声でわめき合い、しかも廃刀令の出ているこの世界で刀を腰に堂々と差している彼らの存在が怪しまれぬ訳も無く。

急に、後ろから声が掛けられた。

「は、いお兄さんたち、ちょっといいですかイ?」

何とも気の抜けた声に、振り向く一同。

そこに立っていたのは洋装に身を包んだサラサラ栗色ヘアで甘いマスクの少年。

しかし彼らにはわかつたはずだ。

少年の体から、自分達と同じ臭い・・・人斬りの纏う、血の臭いが

することを。

そして総司には分かったはずだ。そして、少年にも。

「……気をつけたほうがいいですよ、土方さん。」

「あゝ？何でだ？」

「何でって、こいつ……。」

総司がにやりと唇を歪める。

少年も口を同じようにゆがめた。

「僕／俺と、同じ臭いがする。」

そう　同じFASの臭い。

「……マジかよ。」

途端に苦虫を噛み潰したような顔になる土方。

常々総司には困らせられている土方なのだから、同じようなのが現れて気分がいいはずもないのだ。

「んで、お兄さん達。何でこの廃刀令が出てるこのご時世に刀なんて差してるんでイ?」

「廃刀令?んだそりゃ。」

原田が眉をひそめて問うた。

「廃刀令を知らないなんて嘘にもほどがありませんア。あんたら、攘夷志士ですかイ?」

「俺達は攘夷志士ではない。俺達は」

「まっ、いいや。」

話を途中で遮った少年を睨みつける斎藤。

「とりあえず、あんたらを放っとくわけにはいかねえや。屯所に来てもらいまさア。」

「・・・嫌だと言ったら？」

好戦的な笑顔を浮かべて、少年に問う総司。

少年もまた、にやりと笑う。

「その時は力づく、です。」

そして。

2人は全く同じタイミングで刀に手を掛けると、それを抜き、互い

に飛び掛った。

「おい！」

土方が止めようと声を掛けるも、2人の耳には入っていない。

十数回打ち合つと飛びずさり、そしてまた飛び掛る。

それが数回続き、ようやく2人は動きを止めた。

総司は楽しそうな声で言った。

「凄いね、君。名前は？」

少年も笑う。

「人に名前を聞くときは、自分が最初に名乗るのが礼儀ってもんでさア。」

「それもそうだね。僕の名前は

」

「俺の名前は

」

「新選組一番組組長、沖田総司！」

「真選組一番隊隊長、沖田総悟！」

その場にいた全員（つまりは土方、斎藤、原田、平助、千鶴、そして総司と総悟）は、皆一様に同じ言葉を発した。

悪夢のピタゴラススイッチ

しばらくその場を沈黙が支配した。けれどそれもほんの十数秒のことで、総司の不機嫌そうな声で破られた。

「ねえ、君ふざけてるの？誰にことわって勝手に『新選組』を名乗ってるのさ。しかも『沖田総悟』って、僕と一文字しか違わないじゃないか。」

「それはこっちのセリフでイ。なんであんたらが『真選組』なんだよ。テメエらみてえな隊士、見たこともないでさア。しかも、『沖田総司』って俺のまねですかイ？」

その一言に、総司の眉がピクリと動いた。

「まね？それは君なんじゃないの？見たとこ、僕より年下みたいだし。」

「何言ってるんでイ。テメエとそんなに大差ねえよ。」

「あっ、そうなの？ごめんごめん。小さいから子供かと思っちゃった。」

「ぶっ殺してやるつか？ああ？」

何だか子供の口げんかになってしまったのその場をいさめたのは、
一番大人な原田だった。

「まあまあ、落ち着けよ2人とも。口げんかしたって始まらねえだ
ろ?」

「でもさ、ほんとにこの子ふざけてると思わない?だって『しんせ
んぐみ』だよ?」

「ふざけてるのはテメエの方だろイ。この天人あまんてさまさまの時代に堂
々と腰に刀刺して歩きたあ、捕まえてくれって言ってる様なもんで
イ。」

「??あまんと?何それ新しい金平糖?」

「だからふざけてんのかよテメエは!」

とうとう本気で怒り始めた総悟を見て、傍観していた4人も会話に
入ってきた。

「落ち着いてください!えつと・・・沖田さん!」

まず千鶴が宿めに掛かった。

「「僕/俺は落ち着いてる!」」

「そつちじゃなくて、髪の毛が茶色の人のほうです！」

「千鶴ちゃん、どっちも茶色いよ？」

「えっとあの、どっちかっていうと薄い人の方で……」

もう途中で千鶴も何が何だか分からなくなり、泣きそうになったところを慌てて土方、斎藤、平助がフォローに回った。

「そんなことはいい！それよりお前、さっき『しんせんぐみ』を名乗ったよな？どういうこつた？」

「俺達はお前のような隊士は知らん。」

「それにさっきから、『あまんと』とか『はいとうれい』とか言うてるけど、あれ、どういう意味だ？」

総悟は口をぽかんと開いた。

「天人も廃刀令も知らないって……普通、どんだけ田舎に住んでも知ってることだらイ？」

「けど、俺達は知らねえんだよ。」

「土方コノヤローじゃないですかイ。」

土方と呼ばれた男は一瞬眉をひそめたが、直後、怒鳴った。

「総悟！通報受けたから来てみりやあテメエ何してやがる！往来で刀振り回すんじゃないやねえよ！」

「あれ、見てたんですかイ。物陰から覗き見たア、趣味悪いですね土方さん。」

「覗き見なんかしてねえよ！遠くから見えたんだよ！」

と、そこで土方は視線を感じて顔の向きを変えた。

そこには、自分を凝視する紫の瞳の土方。

「何だ？俺の顔に何かついてるか？」

「……てめえ、土方って名前なのか？」

「だったらどうした。」

「いや……。」

そういつて何かを考え込む仕草をした土方。

「まあいい。テメエら、刀を持って歩くのが許可されてるのは『真選組』だけだ。屯所に来て貰う。」

「って、だから何であんたらが『新選組』なんだよ!？」

平助が土方に詰め寄る。

「何の話だ？俺達は『真選組』だ。そんならいこの服見れば一発だろ？」

「一発じゃないんだよね、それが。」

総司が薄く笑いながら言う。

「だって、僕らも『新選組』なんだもん。」

「あゝ！？何言っつてやがる！？」

「それが土方さん、どうも妙なんですさア。」

総悟が口を挟んだ。

「こいつら、さっきから『天人と廃刀令って何だ』とか変なこと聞いてきやがるんデイ。」

「はあ！？」

驚愕の表情を浮かべる土方。

「いや、マジで何なんだよそれ？」

「俺達はそんなもの、見たことも聞いたことも無い。」

「嘘だろ……。」

イライラした土方は、短くなった煙草を捨て、新たな煙草に火をつけようとした。

が、いかんせんタイミングが悪かった。

キキーツ！

「きゃあ……」

「っ、雪村!？」

千鶴の悲鳴が聞こえ、思わず全員がそちらを見れば。

大型トラックがとつぜん急停止し、積んでいた袋の一つが宙を舞い、千鶴の下へ落ちそうになっていたのだ。

しかし、その前に斎藤が飛び出すと、まだ空中2メートルの高さにあるそれを、居合いで一気に切り裂いた。

どうやら袋には小麦粉が詰まっていたらしく、切れ目からは白い粉があふれ出た。

と、そこへ強風が駆け抜けると、白い粉は一気に当たり一面に吹き飛ばされる。

カチリ。

ライターの火が灯された。

空中に一定量以上の粉塵がばら撒かれ、そこに火をつけると、粉塵が次々に燃えて連鎖反応を起こす。

俗に言う、粉塵爆発である。

運びましょう

「こっちのほうから聞こえてきましたよ！」

「ああもう、早く走るネ銀ちゃん！」

「だ〜か〜ら〜、関わらないほうがいいっての〜。」

2名が走り、1名が引きずられるようにして万事屋の面々は爆音のした現場に着いた。

そして、彼らが見た物は。

「ごぼっ、げぼっ！何ここ煙っぽい！」

「小麦粉のにおいアルなー。」

「だからやめようって言ったのによー。」

彼らの眼前には、わずかな火の臭いと白煙の広がる現場があった。

何があったのか、なんとなく察しがつく。

「何かが発射したんですかね、ここで。」

「・・・心当たりがあるネ。」

「どーせアレだろ、サディスティック星の王子がバズーカぶっぱしたんだろ。」

と銀時が鼻をほじりながら言つと。

「残念ながら今回は俺じゃないですぜい。」

と、白煙の影から総悟が出てきた。

「おうサド。何でテメエが生きてるネ。」

「黙れチャイナ。その頭の横にくっついてるお椀にゴキブリ詰めてやろうか。」

「まーまー。落ち着けよ総一郎君。」

「総悟でさア、旦那。」

何だか本題に入れなさ過ぎて困っている作者の悲壮感を読み取ってくれた新八は、慌てて話をそらした。

「そ、そういうばここで凄い爆発音がしたんですけど・・・何かあったんですか？」

「ああ、それは・・・。」

途端に顔を曇らせる総悟。

「じつは・・・土方さんが突然『マヨネーズが足りないマヨオオオオオオ！』といきなり叫びだして・・・俺のバズーカを奪って乱発したんですア。」

「大串くん・・・。」

「とうとう、マヨネーズで頭がおかしくなっちゃったんですか・・・。」

「あのバカ・・・墓前にはケチャップ供えてやるヨ。」

と、何かしんみりとした空気になったそのとき。

「他人に何でたらめ吹き込んでやがる総悟！」

白煙の中から土方が怒鳴りながら姿を現した。

「生きてたんですかイ土方コノヤロー。」

「あれくらいで死んでたまるか！」

今にも頭から角が生えてきそうな勢いで残念そうな顔の総悟を怒鳴りつける。

と、そこへ銀時と神楽が。

「ちよつと大串くん。爆発事故起こしてその態度は無いんじゃないの？」

「そうアル。責任取れヨ。」

「副長の座は俺が継ぎますから安心して切腹してください。」

「だから俺じゃねえって言うてんだろ！」

額の血管が切れそうになる土方に、新八が不思議そうに問うた。

「じゃあ、何でこんなに此処小麦粉臭いんですか？」

「あー、それは変な奴等が小麦粉の袋を……。」

そこで土方と総悟は、はたと思い出した。

「あまんとつて何だ」と言い、堂々と腰に刀を差していた集団を。

「っ！！あいつらは！？」

背後を振り返ると、白煙の陰に人影は見えなかった。

「ちっ……逃げられたか。」

舌打ちする土方に対し、総悟は飄々としている。

「逃げられてませんゼイ、土方さん。ほら、あそこにいますア。」

「あ？そりゃどういう、」

そこで土方は言葉を止めた。

だんだんと白煙が晴れていき、だいぶ視界が利くようになったために、土方にも何が起こったのかは簡単に理解できた。

「……まあ、人間として当たり前だよな。」

地面に累々と伸びている6人。

そう、彼らは気絶していた。

土方と総悟は気絶しないでぴんぴんしているが、それはひとえに2人が主にバズーカやテロリストやバズーカによって爆発に慣れているからである。

そんなものに普段から慣れていない彼らは、毎日のように浪士を斬ることはあつたとしても、目をくります閃光、全身を包む衝撃、そして耳にガンガンと響く爆音がいつぺんに押し寄せてきて、平気で居るほうがおかしいわけで。

「まあいい、手間が省けたからな。総悟！このままこいつらを屯所へ運ぶぞー！」

「え、面倒くささ。」

「いいからやるんだよー！」

すぐそこにパトカー（かなり大きいという設定でお願いします）あるからそこに適当にぶちこむぞ！え、2人でやれることじゃないですぜい。

というわけで、すぐ傍で騒いでいた万事屋に白羽の矢が立った。

「何で俺らがやんなきゃいけないんだよ。」

「まあ銀さん、人助けだと思ってやりましょうよ。」

「甘ったれたこと言ってるじゃねえぞ新八！世の中はナ、時に非常さをもつて生きなきゃやっていけねえんだよ！」

未だにやろうとしない若干2人に土方が一喝。

「さつさとやれよ！手伝えば、手間賃くらいは出してやるからよ！」

「いやあ人を助けるって素晴らしいね新八くん、神楽くん！」

「そうですね坂田さん！」

「（転職しようかな・・・）」

目を輝かせて働き始めた若干2名と、逆に目を虚ろにして明後日の方角を眺める約1名。

「銀ちゃん、新ハイ！見てヨこいつら！新八が消滅するぐらいのイケメン揃いネ！」

普段は「恋？何それおいしいの？」な神楽だが、流石このときは興奮してまくしたてた。

「消えるってどういう意味だアアアアア！」

「あ？・・・ってこりやすげえわ。死ねばいいのに。」

新八が白目を剥いて怒鳴り、銀時が暗い光を瞳に宿すほど、地面に倒れている彼らはイケメンぞろいだった。

本当に、芸能人が素っ裸で全力逃走してしまうくらいに。

しかし、新八は桃色の服を着た少年（？）を覗き込んだとき、頬を赤らめながらも首を傾げた。

「あれ？この子・・・何か女の子っぽいなあ。」

「どしたヨ新八。」

神楽がやってきて、倒れている少年と新八を交互に見た。そして、

「新八・・・お前、女にモテないからってとうとうこんないたいけな美少年に手をだすアルか・・・。」

「違うからアアアアア！男の子の格好してるけど何か女の子みたいだなあって思ったの！」

言われて神楽はもう一度見る。

確かにその美少年は、ただ女顔という言葉で片付けるには隠しきれない女らしさがある。

うーん、と2人が首をかしげていると銀時がやってきた。

「おいおい何なんだよ。もう全部詰め込んだぞ、あとはそいつだけだ。」

「あ、銀さん。ちょっと聞きたいんですけど。」

「こいつ、何か女の子っぽくないアルか？」

「あ？」

言われて少年をちらりと一瞥すると、銀時は断言した。

「女っぽいつていうか、こいつ女だよ。」

「やっぱりそうなんですか!？」

「何で分かるネ!？」

「俺の股間センサーを舐めちゃいけねえよ。」

けれど、またしてもうーんと首を傾げる一同。

「何で男装なんてしてるんでしょうね?」

新八が皆の思っていることを口に出して代弁したが、答えられるものはいなかった。

「おーい、旦那ア。最後の一人、早く詰めてくだせエ。」

と、沖田が駆け寄ってきた。

「あ、沖田さん。この人、女の子らしいですよ。」

新八が言うと、沖田は鼻をふんと鳴らして一言。

その男装少女を担ぎ上げると、

「んなこた初めから分かってまさア。事情聴取は、屯所についてからだ。」

あ、ついでに旦那達もついてきてくださせエ。手間賃、持ち合わせがないんで。

そう言った沖田に従い、万事屋の3人はパトカーに乗り込んだ。

運びましょう(後書き)

これかいてて思ったこと。

爆発ネタ好きだな、私。

心当たり？あつてほしくなかったね

「しつけーな！俺達は『新選組』だつて何度も言ってるだろーが！」
「それはこつちのセリフだ！俺達が『真選組』なんだよ！同じのが
2つもあつてたまるか！」

「ちよつ、土方さん落ち着いてくれつて！」

「そうですね！ここは冷静に！」

「ああ！？土方だと！？俺の名前まで真似やがつて、舐めてんのか
！！」

「土方さん、あなたの汚い顔なんて誰も舐めませんぜい。」

「総悟オオオオオオオ！」

黙つて茶菓子を食べていた万事屋一同であつたが、やがて銀時がぼ
つりと呟いた。

「・・・早く終わらねえかな。」

実はこの土方&沖田VS新選組の言い争い、かれこれ1時間続いて
いるのだ。

屯所の中に入って6人を取調室に運び込むと、もともと屈強な集団
だったらしく、ぱちりと目が覚めた。

しばらくは爆発によるショックで朦朧としていたが、リーダーと思しき紫色の瞳の男が覚醒するとあとの面々も覚醒が早かった。（男装少女は眠り続けたままだった）

そして今自分達の居るところがさつき居たところではないと知るや、どういふことだと掴みかかってきた。

まあ、もともと怒るのも無理は無いのだ。訳の分からないことを言われて勝手に罪人扱いされて目の前で爆発事故が起こり、拳銃の果てに目が覚めれば知らない場所。

けれど土方も喧嘩っ早いタチであるために、売り言葉に買い言葉。

取調べにもなっていない取調べが延々と続いているのだった。

本当なら帰っているはずなのであるが、まだ手間賃が払われていない。
だから待とうと思っていたのだが。

「・・・もうこれ、後日請求にしたほうがよくないですか？」

「おー、銀さんもそんな気がしてきたよ。」

「酔昆布無くなったアル。」

3人は顔を見合わせると、よっこいしょと腰を上げた。
と、そのとき。

「……………う。」

「あ!」

「どした、神楽。」

「この男装ガール、起きたみたいヨ!」

「あ、大丈夫ですか!？」

神楽の言うとおり、男装少女が手で頭を押さえて起き上がるところだった。どうやら爆発のせいどころか頭を打つなどしたらしい。彼女の仲間らしい男達は未だに言い争いに熱中しており、気づいていないが。

3人が傍によると、少女はまだ意識が覚醒していないのか、ぼんやりしながら言った。

「……………父様……………?」

「へ?」

目を丸くさせる一同。

しかし少女は段々と意識が覚醒してきたのか、目をぱちぱちさせる。

そして目の前にいる3人が見知らぬ人物であると分かると、途端に僅かな警戒と怯えを表情に滲ませた。

「あつ、貴方達は誰ですか！？此処は・・・？」

「落ち着けよ、取って食おうって訳じゃないからよ。」

「そうヨ。食べるなら酢昆布ネ。」

「????す、すこんぶ????」

訳の分からないことを言われて戸惑う少女。
こんな場合の出番はもちろん、新八である。

銀魂でNo.1、2を争う地味フェイスの持ち主ではあるが、優しそうな顔と柔和で丁寧な性格を持つために、初対面の相手に一番うちとけやすい人物でもあるのだ。

「すみません、突然こんなところにつれて来られて、驚かれましたよね。」

「こんな、ところ・・・？」

少女はようやく、今自分の居るところがさっきいたところではないと気がついたらしい。

「ご紹介が遅れました、僕は志村新八と言います。」

「わ、私は雪村千鶴と申します。」

「俺は坂田銀時だ。」

「私は神楽アル。」

緊張が解けてきたのか、かすかに表情を緩めて、千鶴は問うた。

「あの、何で私はここにいるんでしょうか？」

「んー・・・それは、多分刀を持つてるからじゃないですか？」

「え？刀を持つことがダメなんですか？」

きよとんとした表情の千鶴に、銀時が言う。

「そりゃあ、廃刀令のあるこのご時世に刀を当たり前みてえに差してたら捕まるわな。」

「あ、あの・・・『廃刀令』って何なんですか？」

「・・・は？」

2話前の沖田や土方と同じ状態に陥る3人。

しかし、困惑の表情を浮かべる千鶴が嘘を言っていないと分かったらしい。

「は、廃刀令を知らないんですか？」

「はい。前にもそんなことを言われたんですが、聞いたこともありません。」

「マジかよ。廃刀令も知らないって、どんな田舎に住んでるんだ？」

「えっと、家は江戸にあるんですけど、ついさっきまでは京都に居

ました。」

「「「……は？」」「」

更に頭に疑問符を浮かべる3人。

「飛行機で飛んできたアルか？」

「『ひこうき』？何ですか、それは？」

「おいおい、まさか歩いてきたとか言わねえよな。」

首をふるふるとふる千鶴。

「いえ、実は、不思議なことにあつたんです。」

「不思議なこと？」

「はい。あの、私は新選組の屯所に居候させて頂いているのですが、朝食を片付けているときに……。」

「時に？」

「いきなり天井に真っ黒な穴が開きまして、そこに吸い込まれたんです。」

ぼかんとする3人は、千鶴をまじまじと見つめる。

やはり千鶴が嘘をついているようには見えない。

3人の頭の中はごちゃごちゃしていたが、それが急速にまとまりつつあった。

もしかして、もしかしてこの人たちは……。

「……千鶴さん。一応聞きますけど、今は何年ですか？」

「今は、慶応元年ではないのですか？」

無垢な顔から放たれた年号は、彼らの知らない言葉だった。

「銀さん、ひよつとしてこれは……。」

「奇遇だな新八。俺もちよつと思いついたんだ。」

「私もアル。」

そして3人は同時に言った。

「「異世界の人たちがやってきちゃったアアアアアアアア！！？？」」
「」

その大きな声に、言い争っていた7人はそちらを向いた。

「あ、千鶴！目が覚めたのか！」
「大丈夫、千鶴ちゃん？」
「おい、顔に傷はついてねえか？」
「雪村、体は平気か？」
「お、目えさめたのか、千鶴。」

千鶴が目覚めたことに気がつくのと、口々に心配の声を上げる新選組の面々。

しかし、土方は鋭い目を（沖田はだらんとした目を）銀時に向けて言った。

「おい、さっき言ったこと、どついつ意味だ？」

銀時は面倒くさそうに頭をかいた。

「どつから説明すりゃいいのかね……。」

まあ仲良くいきましょーや

それから3人はかいつまんで説明した。

知り合いに頼まれて異世界うんたら装置（名前忘れた）の発電を頼まれたことを。（もちろん幕府に追われる身である源外の名前は伏せた）

「つまり、こっちの連中は違う世界の人間ってことだな。」

「なるほどねイ……。」

総悟が納得したような声を上げた。

「ってこたア旦那、とどのつまり、こいつらは別の世界の『新選組』ってことですかイ？」

「そーいうことだろ。」

「……面白いですねイ。」

総悟が新選組を見てニンマリと笑えば、マヨの土方が顔をしかめた。

「どうにも信じがてえ話だな。だが、」

「信じなければつじつまが合わない、でしょ？」

茶々を入れたのは総司。流石は薄桜鬼の中でもNo.1の腹黒猫王

子。あつという間にこの状況を受け入れてしまった。

「あの黒い穴はそういうわけだったんだなあ……。」

「時空とかそつちの小難しい話はよく分からねえがな。」

納得した顔の平助と原田。

ただ千鶴は、不安な気持ちを隠せずに居る。

「別の世界って……どうやったら戻れるんでしょう?」

「それは確かに気になるな。おい、銀髪!」

紫の瞳を持つ土方が銀時に呼びかけた。

「あ?んだよ?」

「どうやったら俺達は戻れるんだ?」

「んー、とりあえずはジジイ探すところから始まるな。」

「いつ見つかるんだ?」

「さあな。」

銀時が言うと、千鶴の顔がさっと青くなった。

「じゃ、じゃあ私たちどうすれば……!」

「なんなら『真選組隊士』としてここで雇うってのはどうですかイ、土方さん？」

「「「「「「!!!!!!??」」「「「「「「」

「おい、総悟！」

目を剥いた土方の傍に総悟が寄ると、ささやいた。

*以下、小声。

「見たとここいつら、相当腕が立ちますア。元の世界に帰る前に攘夷志士にでも雇われたら大変なことになりますぜイ。」

「それはそうだが……。」

「だったら他に取られちまう前に引き入れといたほうが良いと思いやせんかイ？」

「……。」

確かに、下手に放置しとくよりは見張っといったほうが良いか……。

*以上、小声終了。

こそこそと話す2人を見て土方が眉根を寄せた。

「何話してやがるんだ、あいつら？」

「もしや、俺達をどうするか算段をしているのかもしれませんが。」

こちらもひそひそと言葉を交わす土方と斎藤。

が、やがてマヨの土方が鋭い目を向けてきた。

「おい、お前ら！行く当てはあるのか？」

「あるわけねえだろが！こちらら異世界から来てんだぞ！」

当然のように噛み付く土方。

「だったら、さっき総悟が言ったように、真選組マゼンで働く気はあるか？」

「はあ！？」

啞然とする土方。しかし、

「いいんじゃないですか、土方さん。」

総司が相変わらぬ笑みを浮かべて言った。

「おい総司！何勝手なことやってやがる！」

「だって、実際行くところないでしょう？ここは厚意に甘えておきましようよ。」

「けどなあ、」

「土方さん、意地張ってる場合じゃねえぞ。」

「そーだよ！俺達この世界のこと全然知らないんだからさ！」

「ご迷惑じゃないんでしょうか・・・？」

「俺は副長の指示に従います。」

一部を除いて口々に反論され、土方は半ばヤケになって怒鳴った。

「ああもう！好きにしろ！」

「んじゃ、決まりでいいですねイ、土方さん？」

総悟がニヤリと笑みながら言う。

「ま、近藤さんに許可は取らねえといけねえがな。山崎に探させるか。」

そういつて携帯をいじくりだした土方を置いて、総悟は改めて新選

組と向かいあった。

「んじや、いねからよろしくお願ひします。」

おまけ 《その頃の万事屋》

「大串くんの財布、結構入ってるね。」

「じゃあ今夜は焼肉ですね！」

「カルビ食べたいアル！」

蚊帳の外になって、いつの間にか財布をすったっばい。

まあ仲良くいきましょうや（後書き）

本当は薄桜鬼のしんぱつあんも出したかったんです。
でも、2人の新八をかける地震がありませんでした・・・。
ごめんよしんぱつあん。

こっちの局長

「んじゃあ、自己紹介から始めますかイ？」

「待て、総悟。近藤さんが来てからだ。」

「「「「「近藤さん？」「」「」「」

その名前に一気に反応する新選組一同。

「へえ、こっちの世界の『真選組』も局長は近藤さんなんだな。」

「え？あんたらの世界の近藤さんもですかイ？」

「ああ。近藤勇こさみつてんだ。」

「こっちのは近藤勲いさおでさア。一文字違いですねイ。」

「だな！」

同年代と言う気安さがあるのか、わりとさくさく話す平助と総悟。

しかし、それ以外のメンバーは皆肅々とした態度で真選組局長を待っている。

「（これだけの剣士2人を従えてるってこたあ・・・相当なヤツなんだろうな。）」

「（あの黒髪の男、油断ならないな。副長にいざといふことがあれば、お守りせねば。）」

「（あーあ、千鶴、すっかり怯えちまって・・・にしても、局長さんはまだか？）」

ピシャンッ

土方が一瞬で襖を閉めた。

「……なあ、左之さん。」

「どうした、平助。」

「気のせいかな、俺、なんか死体が見えたんだけど。」

「奇遇だな、俺もだよ。」

ガラガラッ

「ちょっと閉めなくてもいいじゃないですか副長。局長したをここまで連れてくるの大変だったん」

ピシャンッ

またしても一瞬で閉められる襖。

「・・・副長。」

「何だ、斎藤。」

「この世界では死体が組織の頭になるのでしょうか？」

「俺もよく分からねえが、そうなのかもしれねえな。」

「死体が頭になるわけあるかアアアアア！」

土方がシャウトすると共に、再び山崎が襖を開けて、入ってきた。

「どうしたんですか、副長。何か問題でも・・・。」

と、そこで山崎は部屋に居る見知らぬ人物達に目を留め、首をかした。

「あれ、お客さんですか。参ったな、ここに持ってこないほうがよかったですか？」

「・・・いや、本当は紹介するつもりだったんだが・・・。」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

土方が頭を抑える横で、新選組一同がただひたすらに凝視していたもの。

それは、山崎が服の一端を掴み、そこから力なく床に倒れている死体

もとい、真選組局長の近藤勲だった。

恐らく今日も、『愛のハンター』を名乗ってお妙をストーキングしていたのだろう。

そして今日も、ボコボコにされてしまったらしい。

何かもう、とても活字では言い表せないくらいに酷い有様になっていた。

「……なるほど。この人が真選組局長『だった』人なんだね。」

あっさり現実を受け止めた総司は、早速そこらへんに落ちてた棒で死体をつつきはじめた。

が、

「ぐ、ううう……。」

ピクリとも動かなかった死体が突然動き出し、びくつとする新選組一同。

「ふふ、今日もまた一段と素晴らしい一撃だったな、お妙さんの拳は……。」

どこか爽やかな微笑を浮かべながら、死体
もとい、近藤
は起き上がった。

そして不思議そうに首を傾げる。

「おや？おかしいな。俺は確かお妙さんと新八くんの家に居たはずなんだが……。」

「山崎に言っつて連れ戻してもらったんだよ。」

面倒くさそうに言う土方。

「おお、そうだったのか……。む？この方々は誰だ？客人か？」

と、そこでようやく新選組一同に気がついた近藤。

「ああ、そいつらはかくかくしかじかもしもしドラドラって訳なん
でさア。」

「説明がありえないほどに簡略化されてるっ!？」

「ふむ・・・つまりは、この人たちを真選組で雇いたい、そういう
ことだな？」

「ああ、そついうことだ。」

それを聞くと、近藤は豪快に笑い始めた。

「もちろんいいとも!元の世界に戻るまでの間、自分の家だと思っ
てくれて構わないぞ、新選組の諸君!」

ガハハと笑う近藤に、一瞬開けに取られていた一同だったが、誰か
らとも無くふつと表情を緩ませる。

「こつちの世界の近藤さんも、変わらねえな。」

「ああ、お人よしなところはあるけどよ。」

「器が大きいところなんかは、同じだよね。」

はいはい、とそこで総悟がパンパンと手を叩く。

「近藤さんの許可も取れたことですし、自己紹介でも始めましょうや。山崎から。」

「ええっ！？俺ですか？えっと・・・俺は真選組監察方の山崎退です。」

「さがる！？俺達のところの山崎とは反対だな！」

「え？そうなんですか？」

「ああ。俺達の世界にも山崎ってヤツはいるが、山崎蒸ってんだ。ちなみに俺は、原田左之助だぜ。」

ほう、と感心したような吐息を総悟がもらした。

「奇遇ですねい。うちにも殆ど出番はないが原田右之助ってのがいるんですア。」

「俺は藤堂平助！」

「俺の名は斎藤一だ。」

「藤堂凹助ってのと斎藤終ってのもいるんですア。原作にもアニメにも出てきませんが。」

「総悟！大人の世界に首突っ込むんじゃねえ！」

総悟くんは気にしない。

「さっきも言ったけど、僕は沖田総司だよ。」

「・・・土方歳三だ。」

「土方十四郎だ。」

「うわ、土方さんと名前が似てますア。嫌だねイ、土方さんが2人もいるみたいで。」

「僕も丁度そう思ったところだよ、総悟くん。」

「おう総司、アンタとは気が合いそうですア。」

最凶ドSがタッグを組んだ。

「わ、私は雪村千鶴と申します!」

「そうですかイ。ところで千鶴、何で男装なんてしてるんですア?」

「え!」

自分では完璧に男装しているつもりだったので驚愕に目を見開く千鶴。

「なな、何で分かるんですか!？」

「バレバレでさア。」

「うううう……。」

カクリと千鶴は項垂れた。

「山崎、こいつらの人数分の隊士の制服もってこい。」

「分かりました。(千鶴ちゃんのは……どっしりおっしり)」

こっちの局長（後書き）

近藤さんはシリアスなときは使いにくいけどギャグでは素晴らしく
使いやすい人です。

薄桜鬼の近藤さんと比べるとどうしても見劣りしちゃいますけど、
あの器の大きさとおおらかさは人間として好きです。

名前の呼び方

近藤が再び姿を消し、山崎が制服を取りに出て行った後。

真選組の土方は鋭い目で射るように千鶴を見た。

「ここには野郎どもしかいねえ。だから、お前が女だとばれたら何されるか分からない。だから、お前にはここでも男装してもらおうが、構わねえな？」

「は、はい。」

若干緊張しながらも、真っ直ぐに土方を見つめて頷き返した千鶴。

「そんなに厳しくいうこたないでしょうが、土方さん。仮にも女ですぜイ？」

総悟が傍によってきて言う。

「あ、いいんです沖田さん。」

「呼んだ？千鶴ちゃん。」

「お、沖田さん！？抱きつかないでください！」

千鶴に抱きついて満足そうな総司と、じたばたと暴れる千鶴。そし

て、背後から殺気を向ける新選組幹部達。

「にしても、やりにくいねイ。」

「え？」

「僕もそう思ってたんだ。だって、『沖田』と『土方』が2人いるじゃない。」

千鶴は平助以外の幹部を苗字で呼ぶために、ややこしいということなのだ。

「どうすればいいんでしょうか？」

「簡単でさア。年も近いみてエですし、俺を『総悟』って呼べばいいんでさア。」

「分かり」

「ちよつと待ってよ千鶴ちゃん。」

別名『薄桜鬼界の黒笑の貴公子』と呼ばれる沖田がそれを止めた。

「千鶴ちゃん。総悟くんより、僕との付き合いのほづが長いよね？」

「え？あ、はい。」

「僕の方がなじみが深いよね？」

「はい。」

「僕に結構お世話になったよね？」

「は」

《沖田総司にお世話になった回想 BY千鶴》

- ・ 巡察帰りに買ってくれた金平糖を貰う。
- ・ 蛙を大量に持って笑顔で追いかけてくる。
- ・ 何か怪しい笑顔で刀突きつけて脅される。
- ・ 落とし穴に落とされる。
- ・ 水だと言って酒を飲ませようとする。

e t c

《以上、沖田総司にお世話になった回想》

「千鶴ちゃん？物凄く失礼なこと考えてない？」

「い、いえっ！そんなことはありませんよっ！？」

沖田の笑顔に身の危険を感じた千鶴は首が取れそうな勢いでブンブ
ンと首を振った。

「そう。じゃあさ、総悟くんじゃなくて、僕を下の名前で呼んだほ
うが良いと思うんだけど？」

「えっ、ええええええええ！？」

千鶴は思わず真っ赤になった。相変わらず楽しそうな総司。

「ほら、『総司』って呼んでごらん。」

「む、無理です！絶対無理です！」

「そこまで言われると傷つくなあ。」

途端にしゅんとしてみせる総司。うっと息がつまり、何だか罪悪感が湧いてくる千鶴。

そこに救世主(?)が現れた。

「いい加減にしろ総司。千鶴が困っているだろう。」

若干顔をしかめながら(とはいっても普段から無表情なのでよく分からないが)斎藤がいさめようとした。

「何で? 一くんには関係ないじゃない。あ、もしかして

「

更に笑顔の黒っぽさを高めながら、総司は言った。

「一くんも、千鶴ちゃんに下の名前で呼ばれたいとか?」

「なっつっ!?!?」

一瞬で斎藤の顔が朱に染まった。

「誰もそんなことは言っていないだろう!」
「えー、じゃあ何その反応。もしかして想像したの?」
「……す、するわけがない!」
「お二人とも落ち着いてください!」

そして更に外野が。

「千鶴が困ってるだろうが、その辺にしとけよ。」
「左之さんは関係ないでしょ。」
「そうだぞ総司!お前千鶴より結構年上だし、一くんは世話係みたいなもんだから、呼び捨ては無理あるだろ!」
「そうでさア。俺への呼び捨てのほうが楽でしょうがイ。」
「黙れ平助。そこらへんに埋まっている。」
「一くん!?何でそんなに俺だけ扱いが酷いのって痛い痛い痛い!」
「斎藤さん!?平助くんの手首がもげそうですよ!?!」

徐々にヒートアップしていく喧嘩。

やがて、すうつと息を吸った2人の土方。

そして。

「てめえらしい加減にしねえか!?!」
「」

2人の鬼の副長の一喝は、効果覿面だった。びたりと静まり返る一同（ダブル沖田は除く）。

「でもコレ、結構重要なことですよ土方さん。」

「「どつちに言ってるんだよ。」」

「何かヤだな。土方さんって呼ぶたびに2人が返事するの。」

「だったら簡単でさア。」

総悟が言った。

「こつちの土方を『マヨ方』って呼べばそれで解決しますア。」

「んな！？てめえ総悟！」

「いいんですかイマヨ方さん。」

にやり、と黒い笑みの総悟。

「2人の土方がいるよりはそっちのが楽じゃないですかイ。」
「もつと他に案はねえのか！」

更に土方が嘔み付こうとしたとき。

「よろしくお願いしますね、マヨ方さん。」

「すまぬ、マヨ方。」

「騒ぎすぎちまったな、マヨ方。」

「ごめんな、マヨ方さん。」

「え、ええっと、マヨ、方さん・・・？」

真選組副長土方十四郎

もといマヨ方は叫んだ。

「ああもつ！好きにしる！！」

そんな彼の肩に、無骨な手がぼん、と置かれた。

「苦勞してるな、マヨ方。」

哀れみと同情を瞳に宿した土方だった。

「分かるか、土方。」

そして、2人はそろって溜息をついたのだった。

名前の呼び方（後書き）

沖田さんはどうしてこころも暴れるんでしょ。

着せ替え隊士

「お待たせしました、サイズが合うといいんですけどね。」

山崎が全員分の真選組隊服を携えて持ってきた。

「んじゃ、これ着て下さい。」

「着ろって言われても……。」

「どうかしたんですかイ？」

「この珍妙な服は、どのようにして着ればよいのだ？」

そう、生まれてこの方和服しか着てこなかった新選組メンバーは洋服と言うものを初めて見たのだ。

「ああ、じゃあ着方教えるからとりあえず脱いでくだせエ。」

「ちよ、ちよっと待ってください！」

千鶴が赤面して大きな声を上げる。

「どうかしたんですかイ、千鶴？」

「あ、あの……私が別の部屋に移動しますので、それまで待っていただけませんか？」

「別に良くないですかイ？」

「よ、良くないです！」

ニヤニヤ笑ってからかう総悟に対し、真っ赤な顔で照れながら怒る千鶴。

そこに総司も参戦した。

「いいじゃない、千鶴ちゃん。慣れておかないとダメだよ。」

「な、何に慣れるんですか!？」

「安心しなせエ、俺が手取り足取り教えてあげまさら。」

「だから何を!？」

これ以上放っておくと18禁の会話になると悟ったマヨ方は、その間に割り込んだ。

「いい加減にしろ総悟。別室に行つて着方を教えて来い。」

「へいへい。んじゃ、きてくたせエ。」

そして、数分後。

「何かこれ……ぴっちりしてるなあ。」

「動きやすいといえはそうなんだけどな。」

「戦闘向けの服ではあるな。」

「あれ？一くん、『ぼたん』掛け違えてない？」

「黙れ総司（しまった・・・あとで直さねば。）」

真選組隊服を着た新選組を見て、ふむ、とマヨ方は頷いた。

「おー、様になってるじゃねえか。」

「細かい着付けはそのうち覚えておきゃアいいぜイ。」

「くううう・・・あのイケメンぶりを、百分の一でも分けてもらえれば・・・!」

若干一匹のゴリラがうじうじとなってしまうけれど、まあそれは置いて、なかなかどうして真選組の隊服は5人に似合っていた。

平助が千鶴の傍によって、心配そうに聞く。

「ち、千鶴。変じゃ、ないかな・・・?」

「ううん、全然!すごく似合ってるよ、平助くん!」

「お、おっつ!そうか!ありがとな。」

和やかな雰囲気の流れるが、その途端、男達が一斉（マヨとゴリラは除く）に詰め掛けた。

「平助なんかは馴染めないですよ、千鶴ちゃん。僕のがよっぽど着こ

なしてるじゃないか。」

「え！？あ、沖田さんも、お似合いかと」

「ちよつと待ちなせエ千鶴。そんな奴よりも数年間着てる俺のが、むしる体の一部になってるんでイ。」

「総悟くん、えと、その」

「甘いな、こいつらは服に着られてやがる。その分、俺は着こなしてるよな、千鶴？」

「は、原田さん、胸をあまり肌蹴させない方が、」

「千鶴をからかうのは止める原田。お前は千鶴を孕ませる気か？」

「そうだ原田。ところで千鶴。お、俺は似合っているだろうか・・・？」

「あ、えと、はい！」

「そうか・・・。」

「おい、何となくいい雰囲気作ってるんじゃないやねえよ。」

「そうだよーくん。僕とかわりなよ。」

やいのやいのと騒ぎ出す7人。しかしそれも、山崎のふとした一言で納まった。

「あ、そういえば雪村さんの隊服はどうするんですか？多分、俺達のだとサイズが大きすぎると思っんですけど。」

ぴたりと動きを止める7人。

「あ、そうですね。私小さいから・・・どうすればいいんでしょう？」

「それなら心配いりませんぜイ。」

総悟はそう言うと、そこからへんを「そこそとあさり始めた。

「確か寺門通が一日局長やったときに着てた服の予備が・・・お、あつた。」

と言って、きれいにたたまれた服を一式、千鶴に渡した。

「あの、これどのように着ればいいのですか？」

「ああ、教えてあげやすぜイ・・・おい、メス豚！」

総悟が叫んだ瞬間、天井板が外れて一人の少女が姿を現した。

その場にいた一同は思わずぎよっとする。

「お呼びでございますか、ご主人様。」

「呼んだことぐらい分かるだろうが。」

「申し訳ございません、ご主人様。」

派手な可愛らしさを持つ少女
新八の文通相手のきららの
妹で、不幸な事件に巻き込まれた結果、
総悟の下僕と成り果ててしま
った、うららである。

「フン、まあいい。雪村に服の着方を教えてやれ。」

「かしこまりました、ご主人様。」

雪村さん、こっち

に来て。」

「あっ、はい！」

千鶴はきょろきょろに視線を回して隣の部屋に移っていった。

着せ替え隊士（後書き）

パソコン禁止令が出てしまったためにしばらく亀更新が今まで以上になると思います。

たびたびご迷惑をおかけしてすみません。

隊服Ⅱ凶器？

「あ、あのさ、総悟？」

「何でイ平助。」

「さっきの女の子、何なわけ？」

「何って、メス豚に決まってるあ。」

「……ああ、そうか……。」

彼は決めた。

もう二度と彼のSに関しては突っ込むまいと。

そんな総悟と平助を白い目で見つめていた一同は、不意打ちで隣から聞こえてきた声によるめいた。

「ええっ！？こんなを着れませんよ!？」

「大丈夫よ、ほら早く!」

「無理です無理無理……ってうわあ!？」

どたん、ぱったーんと音が聞こえる。

「……何やってんだ、あいつは?」

土方が眉根をひそめる。

「『よつぶく』が着れないんじゃないか?」

「あー、もしかしたらサイズが合わないのかもしれないかもしれませぬね。」

山崎が言うと、総悟が心外だというように言った。

「サイズが合わない？とんでもねえ、ぴったりあうはずでイ。」

「じゃあどうして悲鳴上げてんだよ？」

「ああ、多分それは」

総悟が言いかけたとき、襖ががらりと開いた。

「お待ちせしましたご主人様。雪村さんに隊服をお着せしました。」

きららが正座をして襖を開いた。しかし、そこに千鶴の姿は無い。

「おう。んじゃあ千鶴、出てきなせエ。」

「むむむむ、無理ですー！」

どつやら襖の陰に隠れているらしく、出てこようとしなかった。

「おいおい千鶴、何かあったのか？」

原田が眉根を寄せて言うと、「いえ、あの、その……」と歯切れ悪く口ごもる千鶴。

「ほら、早く！」
「ふわっ!？」

きららに引つ張り出された千鶴を見て、その場にいた全員が目を見開いた。あの総司でさえも、だ。
逆に服を渡した謀報人の総悟はニヤニヤしていたが。

「へえ、よく似合ってるじゃないですかイ。」

総悟の視線は 惜しげもなくさらけ出されている千鶴の足へ向けられていた。
が、千鶴は悲鳴にも近く叫んだ。

「何でこんなに短いんですかあああっ!？」

そう、彼女が着ていたのは上半身は真選組の隊長服。
が、下半身は可愛らしいフリルで縁取られたミニスカートによって、華奢な足が丸見えだったのである。
女の格好をしていたときも男装していたときも、体全体がきっちり覆われていた服を着ていた彼女にとって、もはやこれは下着姿に等しかった。

けれど、男達の反応は。

「へえ、こりゃ目の保養になるな。」
「は、原田さん!？」

原田はどこか色っぽい仕草で手を顎に当て、千鶴を頭のとっぺんからつま先まであますことなく見つめていた。

「本当だね。千鶴ちゃんの足ってかなり細いなあ。」

「お、沖田さんまでそういうこと言わないでください!」

沖田もニヤニヤして見つめていた。そしてじりじりと千鶴に迫り始める。

と、そこで真っ赤になって固まっていた平助が息を吹き返した。

「ちよ、総司、何やってんだよ!千鶴が可哀相じゃんか!」

そして千鶴の前に庇う様にたった。救世主が現れて、思わず千鶴は「平助くん・・・!」と涙目で平助を見つめる。と、そこで振り返ってしまった平助は再び真っ赤になる。

涙目で両手を組み、小動物のように見上げてくるミニス力を履いた千鶴を見れば当然だろうが。

「う、うあ、千鶴・・・とりあえず、何か着てくれ・・・。」

必死で目を泳がせながら言う平助。

「んだよお前。相変わらずウブいのな。」

「うっせーよ左之さん!」

「まあ、仕方ないんじゃない？千鶴ちゃん超絶似合ってるし。」

「まー、確かにな。」

「て、さりげなく2人とも千鶴に近づくなー！」

「は、恥ずかしいです……。」

わいわいやっていると、突如、背後に影が立った。

影に気がついた4人が振り返ると、そこには先ほどまで黙っていた斎藤がいた。

「さ、斎藤さんどうしたんですか？」

「あれ、そういえば一くんずっと黙ってたよね。」

顔とか真っ赤にさせてそうなのにー、と詰まらなさそうにつぶやく沖田。

確かに彼の表情は無表情だった。が、何かをこらえるような顔をしている。

「……千鶴。」

「はっ、はい？」

突然彼は千鶴の肩をがっしりと掴んだ。

「と、とても似合って……！！」

斎藤の言葉はそこまでだった。

なぜなら次の瞬間、千鶴を直視したことによって抑えていた赤い衝動がこらえきれなくなった彼は、思い切り鼻血を拭いて背後に倒れ

てしまったからだ。

「は、一くん!?!」

何とか斎藤の体を支える平助。

「一くんって臨界点突破するとあなるんだ。」
「ていうか、今までよく堪えてた方だろ。」

冷静な分析をする沖田と原田。

「斎藤さん!」

「来るな千鶴!一くんの出血量が増える!」
「う……。」

「一くん!?!どうしたの、大丈夫!?!」

平助と、若干傍によってきた千鶴を見上げて、斎藤は微笑を浮かべた。

「我が生涯に、一片の悔いなし……。」

そういつて、斎藤の体はがくりと力をなくした。

「は、一くん!一くん!?!」

「斎藤さん!死んじゃ嫌です!」

「斎藤、お前のことは忘れないぜ。」

くだらない三文芝居に終止符を打ったのも、やはり2人の鬼の副長
だった。

隊服Ⅱ凶器？（後書き）

あれ、おかしいな。私の知っている斎藤さんはこんなんじゃないかな
たはず（笑）

次からつながりの無い短編になります。気まぐれでシリーズはやる
かもですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3321x/>

薄桜魂～新・真選組奇譚～

2011年12月29日11時54分発行